

サー・フィリップ・シドニーの『アストロフェルとステラ』 におけるペトラルカの影響

根 岸 愛 子*

Petrarch's Influence on *Astrophil and Stella* by Sir Philip Sidney

Aiko Negishi

要 旨 イタリアにおいて14行からなるソネット詩の形式はダンテの『新生』の中にも使われており、ペトラルカが書き始めた頃より1世紀以上前から既に存在していたが、詩の内容において極めて人間的な感情を高らかに唄い上げ、エネルギーと多様性を与えたのはペトラルカである。イギリスにおいてはサー・トマス・ワイアットとサリー伯ヘンリー・ハワードによる *A Book of Songs and Sonnets* が1557年に出版され、ペトラルカ詩の翻訳とその形式を模倣した詩が書かれ、ここに始めてペトラルカが紹介された。当初は余り活気がなかったが、サー・フィリップ・シドニーの書いたソネット詩集『アストロフェルとステラ』がソネット詩流行の火付け役となり、様々な実験が試みられ、高い水準のものに育って行く。シドニーはペトラルカの持っていた透徹した純粋な愛の哲学を継承し、更にドラマ性やきびきびした日常の会話体などを加えてソネット詩の更なる可能性を追求し、イギリス抒情詩に活気と道力を与えた。

(1)

サー・フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney) (1554-1586) は『詩の弁護』¹⁾ (推定: 1579-80) の中で自らの考える詩及び詩人というものについて熱っぽく語っている。確かに詩はアリストテレスが「ミメシース」(この場合は自然の模倣) と言うように模倣の芸術であり、存在するものを「再現したり、模造したり、または描写したりする」“representing, counterfeiting, or figuring forth” (p. 80, 1-2) ののであるが、シドニーによるとすべての学問・芸術は自然の演技者や俳優にすぎない。しかし詩のみが「自分自身の活発な創造力によって高揚し、その結果、もう一つの自然と成り、本来の自然が生み出すものより優れたものを作るか、自然の中にこれまで無かった全く新しい形を作る」(p. 78, 23-26) と述べ、詩の創造性を強調している。そしてすべての学問は人を美徳の道に進ませるものであるが、詩は美徳、悪徳、その他のものの画像を模作し、いわば「もの言う絵」“speaking

*本学教授 英文学

picture” (p. 80, 2)を提示しながら教えつつ楽しませるものであると言う。そしてその最終目的は、肉体という土くれの中に住み墮落してゆく人間の魂を高さ完成へと導くことにあり、詩の倫理的、道徳的効用を強調している。

そもそもこの作品は、詩が実際の社会で役に立たず精神を脆弱にし墮落させるという世の批難に答えて弁明する形を取っている。美徳への効用に力点が置かれるのはやむを得ぬが、シドニーの特異性は、宮廷人としてまた軍人として責任ある公的人生を生きるためにも詩は最も必要であり役立つと論ずることにある。彼に言わせると、最高の知識とは単によく知っているだけでなく、それを実行することであり、アリストテレスの言葉を用いて、「グノーシス(知識)ではなくプラクシス(実行)が結実しなければならない」(p. 90, 13-14)としている。人に美徳を教える学問として哲学と歴史学の場合を論じ、哲学はその方法を教え、歴史は事実や実例を見せてくれるが、実行せずにはいられない程に感動を与え、嬉々として実践させるよう仕向けるものとして詩に勝るものはないと断言する。「この点において詩人は全ての学問(人間についての、また人間の思想に沿う)の中での帝王である。というのは、詩は行く道を示すのみならず、その道のなかに誰もが入りたいと魅せられるほどに甘美な風景を用意しているからだ」(p. 91, 35-p. 92, 2)と述べる。詩が人々の心を魅惑する最大の理由として、詩の言葉の持つ快い音楽性を挙げている。一国を代表する王、政治家、外交官、軍人などに期待される指導力の根源は美徳にあると考えるシドニーにとって、詩(文学といってもよい)にこそ指導者の学ぶべき、また役に立つ模範が描かれており、しかも彼らは快い響きで楽しみながら、いつの間にか感化され美徳の人間に作られていくというのである。

シドニーの詩論ともいべきこの作品の最後の部分は当時の英詩の実状に関する批判になっている。他のヨーロッパ先進国に比べて詩人と詩の地位が低いのは我が国の詩の内容が貧しく、低劣なものしかないからと言う。詩人になるためには、まず第一に天性の才能がなくはならない、その上で第二に、それを賞賛の高みにまで引き上げるには三つのことを鍛錬せねばならない。それは技術、模倣、実習“art, imitation, exercise”である(p. 112, 3)。詩を作るには、その内容を磨くためにも、内容を表現する言葉を磨くためにも技術と模倣を正しく用いねばならないのに当今の英詩人たちはそれを怠っているという。そして第三に、特に愛をテーマとする抒情詩やソネットにおいて最も大切なものは情熱であり、情熱が詩に生み出す迫力(エネルギー)(p. 117, 8)だとしている。この点についてシドニーは特に激しい口調で次のように述べる、「いかんとも抗し難い激しい愛の旗印を掲げている作品の多くは、実のところ、もしわたしが女性ならば、彼等が恋しているとは到底わたしに信じさせることはできないだろう。彼等は冷い心で火のような言葉を使うが、本当にそのような情熱を感じているというより、むしろ恋人たちが書いたものを読んでその中からいくつか大げさな言葉を拾い繋ぎ合わせているようなものであり、それはまるで風の名を充分正確に呼びたいがために、かってわたしの父にその風は北西で南寄りであると述べた人と同じである。(わたしが思うに)真の情熱というものは作者が感じているのと同じ迫力またはエネルギー(とギリシャ人がそう呼ぶ)によってこそ容易に顕わされるものなのだ。」(p. 116, 35-p. 117, 9)

最後にシドニーは英語が如何に詩に適した言語であるかを論じている。文法上の規則も余り厳しくなく、格、性、法、時制などの面倒な変化を必要としないので、頭に浮かんだことを美しく適切

に表現することができる。即ち、本来英語のもっている自由さこそが詩に向いているというのだ。また韻律についても、英詩は音量こそ守っていないが強勢を正確に守り、脚韻によって十分に音楽を耳に奏でさせることができる。リズムにおいても英語は男性韻（一つの脚韻）、女性韻（二つの脚韻）、ズドルッチオーラ（三つの脚韻）の何れも可能で、豊かなリズムを醸すことができるとしている。

シドニーはこの詩論を書きながら、英語の持っている個性と長所を最大限に生かしつつ、女性（あるいは読者）に自分の愛を説得できるような「エネルギー」あふれるソネット詩に自らが挑戦しようと考えた。というのは、殆ど同じ頃に108のソネット(sonnet)と11の歌(song)から成るソネット集『アストロフェルとステラ』(*Astrophil and Stella*)を書いていたのである。

(2)

シドニーは何人かの同時代人からイギリスのペトラルカと称されている。例えば、サー・ウォルター・ローリー(Sir Walter Raleigh)はシドニーへの哀悼詩の中で「我々の時代のスキピオ、キケロ、ペトラルカである」「Scipio, Cicero, and Petrarch of our time」と述べ、サー・ジョン・ハリントン(Sir John Harington)も『古き些事』(*Nugae Antiquae*)で「わが英国のペトラルカ」と呼んでいる。またサー・トマス・チャーチャード(Sir Thomas Churchyard)は『詩の賞賛』(*A Praise of Poetrie*)の中で「国の散文や韻文によって/斬新な著作をものした全ての人の中で/シドニーにこそ...月桂樹の冠を着けさせよ」「Yet of all those that newly wrate/In prose or verse of state/Let Sydney weare .../The Garland lawreate.」と述べている。²⁾ 月桂樹の冠は古来より詩作の競争での優勝者に与えられたものだが、ペトラルカが1341年に桂冠詩人(poet laureate)になったこと、またペトラルカが自分のソネット詩集の中で愛を捧げている女性の名はラウラ(Laura)と呼ばれているが、詩の中でラウラは微風(L'aura)、月桂樹(lauro)、黄金(aureo)など種々の連想を呼び、「金髪」や「太陽」へと広がって、古典神話のダフネとアポロの愛のイメージとも関連する。しかもペトラルカは月桂樹なるラウラへの愛を唄うことによって、全く新しい恋愛詩のスタイルを確立し、自分自身も月桂樹を得る名誉(桂冠詩人になること)を目指していた。³⁾ シドニーがソネット詩集『アストロフェルとステラ』を書くに当たって大いに意識していた先行作品は、先ずはペトラルカのソネット詩集であり、彼の言う「実習」に踏み出す前の「技術、模倣」を磨くための研究対象であった。

ペトラルカ(Francesco Petrarca)(1304-1374)は1327年4月6日■アヴィニヨンのキアーラ教会でラウラに出会ったとされる頃から書き出したソネットや抒情詩(カンツォーネ、セスティーナ、バッラータ、マドリガーレなど)から成る詩集を『カンツォニエーレ』(*Canzoniere: Rerum vulgarium fragmenta*)⁴⁾の名を付して1359年に纏めた。366の詩から成るこの詩集の中で、特にラウラについて唄われている愛の様相は後に「ペトラルカ風恋愛」と呼ばれるようになるがいくつかの特徴をもっている。

まずラウラとの最初の出会いについては、

創造主を憐れんで 陽射しも陰る
あの日のこと わたしは愛の
虜となれる、女人よ そなたの明眸に
縛られて つゆほど怪しみもせぬ一日に。
その日のこととて “愛” (クピド) の矢など
思いも寄らず 一抹の懸念も抱かず
出かけ行く、かくてわが禍いの始まりは
諸人あまねく 憂い悲しむ。
見抜いていたのか “愛” (アモール) は わが無防備を、
両目から心臓へと突き抜ける大事な路が
筒抜けと、それからは 涙の出口 通い路。
“愛” よ思うにお前の誉れになどなるものか、
そうした折に矢を射ても、
堅い守りのそなたには 弓さえ隠し。

(3 ソネット, 1-14 行)

この詩で唄われているように詩人の愛は、言わば一目惚れであった。この日は1327年4月6日でキリスト受難の聖日であり敬虔な祈りの日であって、キューピッドをイメージを持つ愛神(アモール)が仕掛ける戯れの愛にうつつをぬかすことなどあってはならないことである。確かに、貞潔で信仰心の篤いラウラにはアモールも手出しができないが、詩人はその敬虔な美徳の姿に見とれている間にアモールの矢を受けてしまう。ペトラルカの場合、キリスト教の神への愛に従って生きることと異教の愛神の導く愛を受け入れることは全く相入れないことであるから、初めからこの愛の達成は不可能である。しかもラウラは人妻である。

溜息まじりにそなたの名を呼べば
“愛” (アモーレ) が胸に刻んだあの女の
初めの甘い綴り字の調べ外に
響かせる、「褒めそやして」(ラウダンド)
次に会おう「王妃(レアール)のような」み姿に
わが勇気は倍に成り 尊い仕事に取りかかる。
そこで終わりのひとことが叫び声、「お黙り
彼女を褒めるはあなたでなく 他人の肩の荷物」

(5 ソネット, 1-8 行)

手の届かぬ貴婦人を遠くから王妃のように褒めそやすだけでも、「他人のもの、お前にはその資格がない」と言う声が自分の中から聞こえてくる。詩人自身も禁欲的で道徳的な考えの持ち主であるから、アストロフェルの場合のように夫に対する嫉妬を唄うことなど全くない。

むしろ詩人が羨むのはラウラが触れた自然やラウラの故郷の地ヴォクリューズに対してであり、ラウラが関わるものは全て詩人の愛と反響し合って宇宙的な至福の世界を形成している。

幸多き嬉しき花よ 幸せな生まれの千種よ
想いに沈み マドンナがいつも

踏み敷く草花よ、かの甘い言葉に耳傾け
美しい足跡を大切に残す丘の辺よ
しなやかな若樹よ 未熟な若葉よ
愛らしく蒼白む莖よ
小暗き森よ 陽射しに打たれて
陽光が誇らしげな君たちよ
ああ爽やかな郷よ 美しい面立ちと
澄める眼をそっと濡らす清流よ
かの生ける光の 特性を奪うがいい、
懐かしく貴い仕草に触れた君らを ああ
どれほど羨むか！

(162 ソネット, 1-13 行)

ラウラの美しさについては常に天上的なものや、宗教的な徳と結びついて表現されることが多い。

かの人の歩くさまは この世のものならず
天使のみ姿、ことばはよもや
ひとの声とはおもわれぬ 調べ奏でぬ。

(90 ソネット, 9-11 行)

天が心許して 少数者に授けたまう恩恵,
人類のものとは思えぬ 稀有の徳性
金髪陰に隠れし 白髪の思慮
淑女に宿る 尊くも神々しき美,

(213 ソネット, 1-4 行)

貞潔な愛に満つ 甘い手厳しき
はたまた慈愛に満つ 穏やかな拒絶
わが燃え立つ憧れを鎮める 美しい怒り
今にして気づく 美しい怒り、憧れの愚かなるやに。
こよなき礼讓と こよなき清純が
ものの見事に溶け合う 優雅な話し振り、
美德の咲く花 美の湧き出る泉、

何人かの心からも 賤しい思いむしり取りき。 (351 ソネット, 1-8 行)

詩人の熱い思いをラウラは気づいたようだが、それに応答することは全くない、

なのにあなたは 憐れみの気色など
みじんも見せず、“愛神”の放つ矢を
目ざとく防ぎ 無駄骨を折らせる。
ああ千人も 殺めるほどの苦しみに落ちた
わたしを眺め それでいて
明眸からこぼれるのは涙にあらず 軽蔑と怒り。

(44 ソネット, 9-14 行)

それ故、詩人は一度もラウラに対して自分の愛を口に出して述べることはなかった。しかし、詩人の愛はラウラが死ぬまで21年間も続き、死後も愛を書き続ける。そしてラウラの死後、ラウラの無言の拒否の意図は詩人に徳の道を歩ませ、ラウラの待つ天国に導き入れるためであったと悟る。

今にして目覚めるは 女が わが望み
拒みしは わがためを思つてのことと、
甘く険しい眼差しで 燃えはやる
若者の願望を鎮めようと そう思つてのことと。
おん身に感謝捧げん、燃え上がりしころ
その顔と快い軽蔑が わが救いへの

熱き思いを馳せさせた おん身の尊い勧めに。 (289 ソネット, 5-11 行)

ラウラ亡き今も詩人はラウラへの愛を書き綴るが、それは詩人の愛が天に居る彼女の取り成しによって彼女の求道する神への愛と同一のものへと化して、できるだけ早く自分も天に召される日の来るよう祈って欲しいからだと言ふ。

女よ われらが“起源”と共に おん身は
楽しげに 栄光ある玉座に住む、
そなたの貴い魂の 希いがかなって
真珠や紫貝 いやそれとはべつの 装いに飾られて、
ああ淑女の中の 気高くも稀なる驚嘆ぞ、
すべてを見そなわす主の顔に、そなたは
今わが愛を 純粋な信仰を観る、
あまたの涙とインクを注ぎ 書き認めし信仰を。
世に在りしころ慕いしごとく 今大空に住める
そなたに 変わらざるこの心捧げるを ご照覧あれ、
ひたすら希うはそなたの太陽 明眸のみ。
されば世俗を離れ お身独りに心を向けし
長き戦の償いに せめてお身らと共に過ごす日の

早かれと わがために祈られたまわんことを。 (347 ソネット, 1-14 行)

ラウラの本性は終始変わることなく美德の人として描かれ、愛神が駆り立てる詩人の愛がラウラによって神に向かう愛へと変質することで詩人はキリスト教信仰からの逸脱を免れている。この変質の様子は主にラウラの死後に唄われた第二部(264以後)に著しい。

しかし、シドニーがペトルルカを高く評価し、強い影響を受けているのは第一部で描かれている愛神の存在と愛神が見せる様々な姿ではあるまいか。例えば、詩人が詩を書くことができるのは愛神によって愛のインスピレーションを与えられたときであり、それは金色の文字で書かれるほど高貴な主題なのだが、内容においては転落が必至の物語であり、しかもその誘いから決して逃れられぬ程の迫力をもっている、

“愛”(アモール)は幾度となく語った、「お前の

見たままを書くがいい、金色の文字で
書き留めよ、おれがどんなに従者を
蒼ざめさせ 一瞬の間に生かし滅ぼすかを。

…

あの眼が すべての物壊す かの弓矢を
おれに渡すとき きさまの顔は永久に乾くまい、
知ってのとおり おれは涙の糧を食む」。

(93 ソネット, 1-14 行)

愛神の虜になるのは「雅びな魂の持ち主」(165 ソネット, 5 行), 即ち純愛を唄う詩人たちだけである。そして気づかぬうちに、「わが人生の主人に治まりいて、/ 生命の頂点にたっている 彼奴」(65 ソネット, 3-4 行) となる。また愛神は人間のみならず神々をも支配する。

愛に仕える恋人二人に挟まれて
眼に留まるは 気位高き淑女
その傍らに 人も神々をも統べる者、
あちらに“太陽” こちらにわたし。

(115 ソネット, 1-4 行)

“太陽” はアポロのことで、ラウラが月桂樹を連想させ、太陽神アポロの愛を逃れるために月桂樹に変身したダフネの神話を連想させる。いわば、ラウラを中心にしてアポロと詩人とは恋敵であり、アポロの恋敵になるほどに詩人の存在は高められている。

しかし、貞潔な女性ラウラにとっては愛神も詩人も軽蔑の対象であり、いわば二人は負け戦における敗者同士なのだ。

さあ見るが言い、“愛神”よ うら若い娘が
きさまの国を辱め おれの傷に知らんぷり
おれたち二人を敵に廻して 自信たっぷり。

(121 マドリガーレ, 1-3 行)

ときには、愛神は自分の仕掛けた愛の目論見に失敗し責任がとれず、逃げ隠れしているような頼りない存在にもなる。

“愛”は怯けづき 一切の任務をほうり捨て
心へと逃げ込んで 泣きつつ震える、
そこに隠れて 二度とふたたび顔見せぬ。
主でさえも恐れれば、わたしに何ができようか？
今わの際まで 彼女と一緒に生きるほか
貴き愛に殉死するは まこと終わりの美しきかな。

(140 ソネット, 9-14 行)

このように愛神は様々な役を演じるが、愛神の様々な様相を描くことによってペトラルカは理性では如何とも抗し難い愛のあらゆる側面を生き生きと絵画的に描くことに成功した。この点をシドニーは高く評価していたと思われる。ただ、ラウラと違ってエリザベス朝の宮廷人であるステラは、純粋な信仰心から成る美德の人ではない。ステラは愛神と結託したり、利用したりするしたたかな女性である。

(3)

シドニーの『アストロフェルとステラ』にはかなりドラマティックな物語の展開がある。第8ソング以外の詩は全てアストロフェルによって語られており、彼が自分のことを客観的に述べることもあるが、多くは様々な事物に呼びかけ訴えている。その相手はステラ自身であったり、友人、他の宮廷人、宮廷女性、月、犬、雀、自分の寝台、ステラの家に至る道、テムズ川、眠り、夢、擬人化した美德、理性、愛、美、悲嘆、溜息、不在、想い、など様々である。物語の筋はおおまかに言って三部から成る。Oxford版の編者リングラー (William A. Ringler, Jr)⁵⁾によると、第一部はソネット1から51までで、繊細で、知的で、高潔な倫理観を持つ青年アストロフェルが始めて知った抑制できぬ愛へのリアクションが描かれている。彼は抑制できぬ感情に喜びを見出せず、恋の支配下に入ることに抵抗しようと、理性は感覚を征服する、愛する人への崇拜は偶像崇拜にすぎぬ、肉体的美はプラトニックな善の影にすぎぬ、われわれの義務はこの世のことにではなく来世の準備にある、などというような伝統的な教えで自らを説得しようと試みるが、結局は、「それでも、わたしはステラを愛さずにはいられないのも真実だ」“yet true that I must love Stella” (Sonnet 5, 14)と認めざるを得なくなり、その後は恋の囚われ状態を正当化する論理を考え出していく。第二部はソネット52から第8ソングまでで、アストロフェルは愛への抵抗を全く止め、ステラへの積極的求愛に乗り出す。これまで彼には距離を置いて反応を示さなかったステラにも変化が現れ、美德の道に外れぬという条件付きで彼に彼女の心の中での君臨を許すと言う(ソネット69)。その後は抑えていた欲情を解放して、眠っているステラからキスを盗み(第2ソング)、ステラが夫を裏切るとはむしろ正義であると唄い(ソネット78)、ステラに更なる求愛を迫ると、彼女の方もアストロフェルを愛していることを認める。しかし名誉を守るために二人は別れねばならないと言い(第8ソング)、突然の別れがやってくる。第三部は第9ソングからソネット108までで、別離の後のアストロフェルの絶望や彼女の不在による悲しみが唄われ、再会を試みるがステラの冷たく追い払うが如き態度に、遂に彼女を積極的に追い求めることを断念する。愛することを止めることはできないし止めないが、事実と共に生きて行くしかないと言唄って終わる。

ドラマティックな構成を持つこの作品のなかで、宮廷人であり、詩人であるアストロフェルがペトラルカの名前を挙げて論評している箇所がある。「長い間絶えていた哀れなペトラルカ式の悲嘆に新たな溜息を加え、それを自分自信の知恵であるかのようにして唄う君たち」“You that poore Petrarch's long deceased woes, /With new-borne sighes and denisened wit do sing;” (Sonnet 15, 7-8)と述べ、200年も昔にペトラルカが編み出した悲嘆の表現形式が今この国で流行し、それを機械的に取り入れているだけの同時代の詩人たちを非難している。そして特に彼等はペトラルカの矛盾語法 oxymoron を乱用する、

Some Lovers speake when they their Muses entertaine,
Of hopes begot by feare, of wot not what desires:
Of force of heav'nly beames, infusing hellish paine:
Of living deaths, deare wounds, faire stormes and freesing fires:

(Sonnet 6, 1-4)

「ある恋愛詩人たちが詩神を歓待するときに語ることは、
恐怖が生み出す希望、欲望が望まぬもの、
地獄の苦痛を注入する天上の光の力、
生きながらの死、愛しい傷、晴天の嵐、凍てつく火など。」

このようにペトラルカのオクシモロンを模倣することは「生得の感性の欠如を暴露し」“bewray a want of inward tuch” (Sonnet 15, 10), 「ついには盗品は明るみに出てしまう」“at length stolen goods do come to light” (Sonnet 15, 11) と言っているが、これは直接ペトラルカへの批難というよりペトラルカを模倣する同時代の詩人への批難である。むしろペトラルカの恋愛詩は苦しみと喜びを同時に持つ愛の悲嘆をオクシモロンを使って生き生きと表現しており、最終的に救いの喜びに到達することを予感させるのに相応しい。シドニーがペトラルカの恋愛詩に強く反発している点はペトラルカの愛の究極の楽観性にある。アストロフェルの愛は救いのない深い絶望に終わる。深い絶望感こそ不可解な人生に対するシドニーの人生観であるからだ。

Grief find the words,

...

Or if thy love of plaint yet mine forbears,
As of a caitife worthy so to die,
Yet waile thy selfe, and waile with causefull teares,
That though in wretchednesse thy life doth lie,
Yet growest more wretched then thy nature beares,
By being placed in such a wretch as I.

(Sonnet 94, 1-14)

「悲嘆よ、言葉を見つけておくれ、

...

あるいは、もし嘆き好きのお前でも、死ぬのが当然の卑劣漢の
わたしの悲嘆などごめんだというなら、
お前自身のことを嘆くがよい、理由のある涙を流して嘆くがよい、
お前の人生は悲惨の中にあるのだけれど、
わたしのような惨めな者の中に住まわされていると、
お前の天性が耐え得る以上に惨めになるのだから。」

以後は、シドニーの詩とペトラルカの詩の相異について述べたいと思う。まずは愛神についてであるが、基本的なイメージについてはシドニーもペトラルカと余り相異はないのだが、ステラと愛神の関係はペトラルカの場合とは大いに異なっている。ラウラは詩人にも愛神にも冷たく無感動であり、愛神とは無縁の存在として描かれているが、ステラの方では愛神はステラ自身の中に入り込んでいく。初めは、ギリシャ生まれの愛神はこの北国の寒い気候に慣れず暖かい心地良い所を探していてステラを見つけたのだが、彼女は愛神に対してとても冷たいのでアストロフェルの心に逃げ込む(ソネット8)。しかし、狡猾い愛神はキューピッドという子供の姿を借りてステラの眼の中に

入り、かくれんぼなどして遊んでいるうちに(ソネット 11)、髪、唇、吐息を占領し、誰もがそれらの魅惑から逃れられないのを知ってステラを自分自身のものだと思い込んでしまうが、彼女の心は難攻不落の砦で、心の中にまでは入り込めない(ソネット 12)。そこで「キューピッドは貞節の従者になることを誓ったのか」“Cupid is sworne page to Chastity?” (Sonnet 35, 8)、巧く立ちまわって今ではステラの副官“Lieutenant” (Sonnet 36, 5) となっている。ステラ自身は愛神に対して、あるときは愛神を奴隷の如く扱う圧制者となり(ソネット 35, 10 行)、またあるときは出来の悪い生徒を厳しく罰する女教師となって(ソネット 46)、ステラも愛神を積極的に手なづけ自分の思い通りの愛の形を作り上げようと利用する。そんな頼りない愛神にアストロフェルは不満をぶっつけ、愛神はアストロフェルと連帯し彼の愛の達成をこそ助けるべきであると訴える。

I lodg'd thee in my heart, and being blind
By Nature borne, I gave to thee mine eyes.

...

That I perhaps am somewhat kinne to thee;
Since in thine armes, if learnd fame truth hath spread,
Thou bear'st the arrow, I the arrow head. (Sonnet 65, 7-14)

「わたしは君をわたしの胸に宿らせ、盲目に
生まれついた君に、わたしの眼を与えた。

...

おそらく、わたしは君にとって幾分かは親戚なのだ、
というのは、もし博識な名声が真実を伝えているとすれば、
君は武器として矢を持ち、わたしは(紋章に)矢尻を持っているのだから。」

シドニー家の紋章には矢尻が描かれている。紋章というのは紳士階級以上に紋章院が許可する記章で、一人に一つだけであり、同族であれば一部は同じ模様が継承されるが全部が同じであってはならない。矢に因んだものを持つキューピッドとアストロフェルは同族なのだから結束すべきだというのがアストロフェルの言い分であり、表現は斬新である。しかし、ペトラルカと違ってこの作品では女主人公が愛神を思い通りに扱っている。

さて、ペトラルカとシドニーの「ソネット詩集」での最も大きな相異点は女主人公の本質と美徳観にある。確かにステラは「美徳の人」として描かれているが、常にその美徳はステラの持つ感覚的美が誘発するものであり、むしろステラの本質は感覚的な美貌にあると言える。「美徳の女王の宮廷は、人はステラの顔をそう呼んでいるが/自然の最高の家具で設えられている」“Queene Vertue's court, which some call Stella's face, /Prepar'd by Nature's Chiefest furniture,” (Sonnet 9, 1-2) とあり、続いて彼女の身体の各部分が美しい宝石に例えられていく。そして、

The wisest scholler of the wight most wise
By Phoebus' doome, with sugred sentence sayes,
That Vertue, if it once met with our eyes,
Strange flames of Love it in our soules would raise;

But for that man with paine this truth descries,
While he each thing in sense's ballance wayes,
And so nor will, nor can, behold those skies
Which inward sunne to Heroicke minde displaies,
Vertue of late, with vertuous care to ster
Love of her selfe, takes Stella's shape, that she
To mortall eyes might sweetly shine in her.
It is most true, for since I her did see,
Vertue's great beautie in that face I prove,
And find th'effect, for I do burne in love.

(Sonnet 25, 1-14)

「アポロの神託により最も賢いと言われた人の
最も賢い弟子が、甘美な言葉で述べている、
美德は、ひとたび我々の眼に出会えば、
我々の魂の中に愛の不思議な炎を燃え立たせるであろうと。
しかし、人は一つ一つを感覚の秤で量り、
立派な精神には内なる理性の太陽を見せるあの空を
見ようともせず、また見ることもできない間は、
人がこの真実を見出すのは困難である。
それ故、最近、美德は自分自身への愛を掻き立てようとの
気高い配慮によって、ステラの姿を取ったのだ、
ステラの中で人の眼に美德が美しく輝いて見えるようにと。
それは全くの真実である、というのはわたしが彼女に会って以来、
彼女の顔にわたしは美德の放つ大いなる美を認め、
その力を発見した、なぜならわたしは愛に燃えているのだから。」

上記のプラトン説を、シドニーは『詩の弁護』の中でも使い、「美德を見ることが出来る人はその美しさを愛して恍惚となるであろうというプラトンやキケロの言葉が正しいとすれば」(p. 98, 5-7)と言っている。しかしプラトンは美が喚起する愛の力の強さについて述べているだけなのだが、⁶⁾シドニーは美がもたらす愛の力と美德がもたらす愛の力を同一のものにしている。美は美德なりとする当時の世俗化した新プラトニズムにおいてはポピュラーな考え方であったし、愛を肯定する当時のソネット詩では愛の対象は美であり、同時に美德でもあった。しかしシドニーは更に一歩進めて、愛の本質を肉体的欲望 (desire) の肯定にまで到らしめた。

Who will in fairest booke of Nature know,
How Vertue may best lodg'd in beautie be,
Let him but learne of Love to reade in thee,
Stella, those faire lines, which true goodnesse show.
There shall he find all vices' overthrow,

Not by rude force, but sweetest soveraigntie
Of reason, from whose light those night-birds flie;
That inward sunne in thine eyes shineth so.
And not content to be Perfection's heire
Thy self, doest strive all minds that way to move,
Who marke in thee what is in thee most faire.
So while thy beautie draws the heart to love,
As fast thy Vertue bends that love to good:
'But ah,' Desire still cries, 'give me some food.' (Sonnet 71, 1-14)

「美德はどのようにして美の中で最も立派な姿で居られるのかと自然の最も美しい書物の中で知りたいと思う者には、ステラよ、その者には、真の善を示す美しい詩行をあなたの中に読みとらせ、愛神について学ばせるがよい。そしてそこにて全ての悪徳が、暴力によるのではなく最も甘美な理性の統治によって、崩壊することを知らしめよ、その光からは闇の鳥たちは逃げ出してしまうのだから、そのような内なる理性の光があなたの眼に輝いている。そしてあなた自身は完全の後継者であることに満足せず、あなたの中にある最も美しいものを注目する全ての人の精神を、その道に導こうと努力する。そしてあなたの美が心を愛に惹きつけている間に、あなたの美德はしっかりとその愛を善へと向かわせる、

『しかし、ああ』と欲望は常に叫んでいる、『わたしにも何か食物をくれ』と。」

これ以後アストロフェルの愛は欲情へと進み、これまで抑えていた欲情を自由に解放して、眠っていたステラからキスを盗むほどに積極的な行動をするのだが、このような具体的な行動や出来事は主としてソングの形で唄われる。

Her tongue waking still refuseth,
Giving frankly niggard No:
Now will I attempt to know,
What No her tongue sleeping useth.
...
Oh sweet kisse, but ah she is waking,
Lowring beautie chastens me:
Now will I away hence flee
Foole, more foole, for no more taking. (Second song, 9-28)

「目覚めているとき彼女の舌はいつも拒絶する、

吝な『だめです』を気前よく与えながら、
今やわたしは知りたいのだ、
如何なる『だめです』を眠っている彼女の舌が使うのかを。

…

おお、甘美な口づけよ、だが、ああ、彼女は眼を覚ました、
美しい眉を顰めてわたしを叱る、
今やわたしはここから逃げ出そう、
愚か者よ、更なる愚か者よ、それ以上を奪えないなんて。」

その後アストロフェルは森の中で二人だけで会うことに成功し、ステラ自身の心の内を聞かせて欲しいと迫る。ステラの答えは「第8ソング」で唄われる。

‘If more may be sayd, I say,
All my blisse in thee I say;
If thou love, my love content thee,
For all love, all faith is meant thee.

‘Trust me while I thee deny,
In my selfe the smart I try,
Tyran honour doth thus use thee,
Stella’s selfe might not refuse thee.

‘Therefore, Deere, this no more move,
Least, though I leave not thy love,
Which too deep in me is framed,
I should blush when thou art named.’

(Eighth song, 89-100)

「『もしこれ以上のことが言えるなら、言います、
私の幸せは全てあなたの中にあります、
もしあなたが愛してくださるなら、我が愛するひとよ、安心して下さい、
全ての愛、全ての信頼はあなたに向っているのですから。

信じてください、私があなただを拒んでも、
心の中で痛みを感じています、
名譽なる暴君がこのようにあなたを扱いますが、
ステラ自身はあなたを拒んではいません。

ですから、あなた、もうこれ以上行動しないで下さい、
私はあなたの愛を捨てはしませんが、

それが余りに深く心に入り込んで、

あなたのお名前を聞くと私の顔が赤くなつては困りますから。』」

ステラが言葉によってはっきりとアストロフェルへの愛を認めてくれた時が同時に別れの宣言の時でもあった。「義務という鉄の規律によって別れなければならなくなった」“By iron lawes of duty to depart” (Sonnet 87, 4) とアストロフェルは言っている。宮廷人たるアストロフェルにこの地を離れねばならぬ新たな任務が生じた故の別れというのが表面的な理由であるが、再び夜に忍んでステラに会いにいったアストロフェルに対するステラの態度は異様であり、宮廷人としての体裁を守るための極めて杓子定規な冷淡さで拒絶する。

‘Who is it that this darke night,
Underneath my window playneth?’

…

‘Why alas, and are you he?
Be not yet those fancies changed?’

…

‘Well in absence this will dy,
Leave to see, and leave to wonder.’

…

‘But time will these thoughts remove:
Time doth work what no man knoweth.’

…

‘What if you new beauties see,
Will not they stir new affection?’

…

‘But your reason’s purest light,
Bids you leave such minds to nourish.’

…

‘Well, be gone, be gone I say,
Lest that Argus eyes percieve you.’
O unjustest fortune’s sway,
Which can make me thus to leave you,
And from lowts to run away.

(Eleventh song, 1-45)

『どなたです、この暗い夜に、
私の窓の下で嘆いているのは？』

…

『ああ、あなたでしたか、
まだあの気まぐれ心は変わりませんか？』

…

『離れていればそれも失せるでしょう、
会うのを止め、感嘆するのを止めなさい。』

…

『でも時が愛の想いを消し去ってくれるでしょう、
時は人にはできない働きをします。』

…

『新しい美人たちにお会いになれば如何ですか、
彼女らが新たな愛を掻き立ててはくれないでしょうか？』

…

『けれどあなたの純粋な理性の光は命じます、
そんな心を養うのは止めなさいと。』

…

『さあ、帰ってください、帰ってと申しているのです、
百眼のアルゴスがあなたのことを感づくとも困りますから。』
おお、なんと不当な運命の支配、
こんなふうにはわたしをあなたのもとから去らせ、
無骨者たちから逃げ去らせるとは。』

アストロフェルとステラの住む宮廷は振るまい方において礼節、形式、慣例、規則などに絶えず心配りを要する世界であり、虚飾の渦巻く世界である。愛の表現にも形式があった。

Because I breathe not love to everie one,
Nor do not use set colours for to weare,
Nor nourish speciall lockes of vowed haire,
Nor give each speech a full point of a grone,
The courtly Nymphs, acquinted with the mone
Of them, who in their lips Love's standerd beare;
'What he?' say they of me, 'now I dare sweare,
He cannot love: no, no, let him alone.'

(Sonnet 54, 1-8)

「わたしは全ての人に愛を口に出すわけでもないし、
決まった色の服を着ることに慣れていないし、
愛を誓った印の特別な髪型をしてもいないし、
一言話す度にうめき声の終止符を打つこともないので、
唇に愛神の旗を掲げている者たちの
嘆きの仕方に通じている宮廷女性たちは、
わたしのことについて言っている、『なんと、彼が？ 誓って言うけど、
彼は恋なんかしてないわ、いえ、いえ、放っておきましょう。』」

そしてステラもこの世界の中心的存在であり、ソネット詩事態が宮廷人にとって愛を伝えるための一つの手段であり、社交の道具であり、教養でもあった。ソネット詩や恋愛詩は眼で読まれるだけでなく、人々の前で朗読されるものであり、詩作品のみならず声と朗読の仕方にも高度な音楽性が要求される。

in piercing phrases late,
Th' anatomy of all my woes I wrate,
Stella's sweete breath the same to me did reed.
O voice, o face, maugre my speeche's might,
Which wooed wo, most ravishing delight
Even those sad words even in sad me did breed. (Sonnet 58, 9-14)

「近頃、鋭い言葉で
わたしはわたしの悲嘆の全ての分析を綴った、
それをステラは甘い吐息でわたしに読んで聞かせた。
おお、その声、その顔、わたしの言葉は
悲しみを激しく嘆いているのに、その悲嘆の言葉でさえ
悲しむわたしの中に恍惚たる喜びを生み出す。」

詩人アストロフェルはソネット詩のなかでペトルルカの伝統を越え、もっと人間的な愛の姿を唄い、人間性に自然な情欲を肯定する迫力ある新しい愛の詩を唄おうと必死にもがいているが、ステラの方は宮廷の社交、礼節、教養、気取りのコンヴェンションから一步も出ていない。⁷⁾ 外面的にはペトルルカが唄う貴婦人のコンヴェンションを守っているが、内実すなわち美德の本質は全く異なっている。ステラにとっての美德はエリザベス朝宮廷社会の掲げる社交や礼節の範疇から逸脱せず、悪い噂の種にならないことであつたのだ。

注

- 1) Sir Philip Sidney, "A Defence of Poetry," *Miscellaneous Prose of Sir Philip Sidney*, ed. by Katherine Duncan-Jones and Jan Van Dorsten (Oxford: The Clarendon Press) 1973.
- 2) Sir Walter Raleigh, Sir John Harington, Sir Thomas Churchyardからの引用は Lisa M. Klein, *The Exemplary Sidney and the Elizabethan Sonneteers* (Newark: University of Delaware Press) 1998 の Introduction, 13-39 を参照。
- 3) ペトルルカの訳詩の引用及び註釈の全ては以下の著作による。
ペトルルカ (池田廉 訳), 『カンツォニエーレ: 俗事詩片』, 名古屋大学出版会, 1992 年
- 4) 前掲書の「ペトルルカ年譜」を参照。
- 5) Sir Philip Sidney, *The Poems of Sir Philip Sidney*, ed. by William A. Ringler, Jr. (Oxford: The Clarendon Press) 1962, Introduction, xlv-xlix を参照。なお, "Astrophil and Stella" からの詩の引用は全て同書によるものである。
- 6) プラトン (藤沢礼夫 訳), 『パイドロス』『プラトン全集 5』, 岩波書店, 1986 年, 250 D, 190-191.
- 7) David Kalstone, *Sidney's Poetry: Context and Interpretations* (Cambridge: Harvard University Press)

1965, 133-178 を参照。